

■ 修士論文要旨

# 三位一体の国際援助

## — NGO・国家・国際機関の連携で世界に挑む —

A Tripartite Approach in International Development Assistance

— For integrated efforts among Nation States, International Organizations and NGO's —

神奈川大学大学院 経営学研究科  
国際経営専攻 博士後期課程

大 澤 幸

昨今、日本でも「国際援助」が求められるようになり、途上国への多額の資金援助が行われている。さらには多くの日本人が国境を越え、途上国で人道・技術援助に取り組むようになった。しかし、既存の援助に対しては、それが本来あるべき援助の形なのであるか、という疑問も散見されるところである。そうした問題意識のもと、本論文では「援助」を根本から問い直し、現状を超える「援助」のあり方について考察した。

本論文の目指すところは、援助とは一体何を意味し、誰がどういう形でおこなうべきかを考察することである。その理由は、現在、途上国援助の主体となるアクターが国家であることに限界を感じるからである。我々が抱える問題はグローバルに発生し、その問題は玉突き事故のように連鎖している。すでに、国内で食い止められるような状況ではない。

さらにこの状況下で、窮地に追い込まれている弱者を見出し、弱者の自助努力によって生活していけるようになるまでの援助を、迅速且つ細やかにおこなえるのは、どのようなアクターであるかを明確にした。

まず第1章では、援助の形態を二国間・多国間・

草の根援助と分類し、それぞれの担い手を明確にした。その上で、二国間援助については「政府開発援助」を中心に、また多国間援助については「国際連合」を中心に論じた。草の根援助としてはNGOを取り上げ、なぜ市民主体の援助団体が生まれたのか、その背景を考察するとともに、NGOを大きく3つに分類し、その特徴を論じた。

第2章では、国家主体の二国間、多国間援助の利点と弱点を考察した。二国間援助では、援助側の「国家」という立場が利点でもあり、また欠点でもあった。最大の利点は、莫大な援助資金を税金として徴収することができる点である。しかし、国益に重きが置かれると被援助国のニーズに対応したかのような資金・技術援助が、極端に言えば、実は被援助国の資源を搾取するという形になっている場合もあった。一方、国連を中心とした多国間援助の利点は、各国の援助を調整・仲介することで、包括的なアプローチができる点などである。しかし、いずれにせよ国家主体の援助には、援助側の意思が強く反映されてしまう部分があることは否めない。

また、被援助国側のガバナンスに問題があっても、その政府を通して援助が行われ、時として、

最も優先されるべき弱者に援助が行き届かないという欠点も明らかになった。

そこで、国家主体ではなく、市民主体の草の根援助の可能性を「NGO」を通して考察した。ここで明らかになったNGO、または草の根援助の利点は、それが被援助側の住民と共にあることであり、彼らのニーズや現地の環境を熟知している点である。さらに、状況に応じて迅速に対応し、時に、他のNGOとの連携をとりながら効果的な活動を展開していることが明らかになった。また、NGOに共通する特徴は、弱者への援助を自らの使命とし、思いやりと熱い情熱を抱いて取り組んでいる姿である。現場に根を張り、現地の人々と共に協働するNGOは、国家主体の援助を超えた、新たな可能性を保持していることが明らかになった。

そこで第3章では、NGOを大きく3つに分け「実働型」として「NPO2050」を、「アドボカシー型」として「PARC」を、「ネットワーク型」として「ACC21」を取り上げ、それぞれの活動内容からその理念や意図を論じた。本論文では、少しでもNGOのリアリティーを出したかったため、筆者と何らかの関わりを持った、これら3つのNGOを取り上げた。

第4章では、「NGOと国連」、「NGOと政府」の連携を論じた。国連の場合は、国連創立当初からNGOを参加させてきた。今ではNGOをありとあらゆる協議に参加させ、時には政策の段階から実行まで、NGOと共同して援助活動に取り組んでいる。一方、日本政府とNGOの連携は、まだまだ課題が多い。しかし、JICAのように実働部隊はNGOとの連携を意識的に取り入れている。

今現在、国際政治の場も国連の場も国家主体で動いていることは否めない。しかし、国家主体の限界も明確になってきた中で、NGOの地位をより向上させ、NGO・政府・国際機関の「三位一体の援助」こそ、現段階では最も適した援助の形であるという結論に至った。

そのためには、草の根の人々が援助の場、さらには社会全体をリードしていく主役となるべきだ

と筆者は考えている。もちろん、現段階においては、NGOもまだまだ課題を抱えておることも事実であり、「三位一体」による援助体制が最も効果的であるという結論に変わりはない。

近い将来において、草の根の「市民」が名実ともに主役となって、国境を感じさせない、市民の意思による世界が構築されていくという見通しがあることも本論文の結論において指摘した。